神島のシラヤ崎に立つ灯台。

CHRONICLE OF MIE
VOL.7
【文学編】

神島を舞台に。三島由紀夫の小説『潮騒』。

三島由紀夫の代表作の一つ『潮騒』。
そこには舞台となった鳥羽市神島の
豊かな自然が描かれている。
自然と調和した人の精神と肉体。
若者たちの恋愛模様の背景に
作家は自身の理想を見つめていた。

尾西 康充 おにし やすみつ
人文学部・文化学科教授
専門は日本近代文学

三島由紀夫の書き下ろし長編『潮騒』（昭和29年／1954）は、刊行前年の3月と8月に作者が鳥羽市神島に訪れて取材した内容に基づいて創作されている。神島は鳥羽佐田浜より市営定期船で48分の距離にある周囲3.9kmの小さな島である。距離の上では伊良湖岬からの方が近いが、伊良湖水道は古来海の難所と言われ、佐田浜との交通が一般的となった。歌島（かじま）や亀島、甕島（かめしま）とも呼ばれた神島は、島民からは神の支配する島と信じられ、後に八代龍王を祭神として八代（やつしろ）神社が設けられた。小説の冒頭「歌島は人口千四百、周囲一里に充たない小島である」と記され、島の風景が詩情豊かに作品の中に織り込まれている。

神島の若者は、教育や衛生、沈没船引き揚げや海難救助、島の祭事である獅子舞や盆踊りなどを学ぶために、浜辺の小屋で合宿生活をする「寝屋」という風習を共有している。それは神島独特の風習と言えるもので、共助の精神を日常生活の中で自然に学んでゆくのである。

物語の中心人物は、男女4人の若者たちである。神島の自然とともに生きている久保新治と宮田初江――新治は太平丸に乗船して蛸漁に出かける。寡黙で強壮な肉体を持ち、強い意志を秘めている。戦争の最後の年に米軍機の機銃掃射を受けて父が死亡して以来、母は海女の収入によって二人の息子を育ててきた。他方、初江は女4人男1人の末娘。昨年胸の病で長男が死亡し、老いた父照吉の世話をするために養家先から復籍した。資産家の照吉は185トンの機帆船歌島丸と95トンの春風丸の船主であった。「黒サージのズボン、赤いセエタアを着て、赤ビロードの足袋に下駄」履きという服装こそ垢ぬけないが、初江は健康な精神と肉体を持っている。

彼らに比べて、青年会支部長の川本安夫は標準語を話し、いつも理路整然と議論を進める。安夫はひそかに初江に恋して入婿を狙っている。他方、燈台長の娘千代子は、昔女学校の教員をしていた母の影響から東京の大学に進学した。帰省したときの千代子は「白粉気のない顔を、地味な焦茶のスーツ」で目立たなくしていた。目鼻立ちには魅力があるものの、いつも陰気で自分が美しくないと思い込んでいる千代子は、新治を横恋慕しようとして、初江と新治の悪い噂を島に流す。「悪意は善意ほど遠路を行くことはできない」と灯台長が語るように、三島はこの小説を通じて「教養」がもたらす害毒を批判し、自然と一体化した人間の精神と肉体の理想を説いた。つぎのような描写のなかに、このテーマが最もよく示されている――「若者は彼をとりまくこの豊饒な自然と、彼自身との無上の調和を感じた。彼の深く吸う息は、自然をつくりなす目に見えぬものの一部が、若者の体の深みにまで滲み入るように思われ、彼の聴く潮騒は、海の巨きな潮の流れが、彼の体内の若々しい血潮の流れと調べを合わせているように思われた。」

三島由紀夫『潮騒』（初版）
（三重県立図書館蔵）

新治と初江に比べて、都会で発行されている三文雑誌を読んでいる安夫や、大学で英文学史の講義を受けている千代子の知性がいかに貧しいものかが描かれている。だが、この小説が発表された16年後、もはや知性とは呼べない、いびつに肥大化した妄想の中で三島は最期を遂げた。三島の切腹に際して介錯を任されたのは、盾の会メンバーで四日市出身の森田必勝であった。作家が作品を通じて造形する観念の世界は、どのように現実と向き合うのか――現実よりも強いリアリティーが作品に存在してこそ、読者の胸の中に真のロマンティシズムが芽生えるのである。

三島 由紀夫 みしま ゆきお
作家　1925年～1970年

大正14年（1925）、東京四谷に生まれる。本名平岡公威。東京大学法学部卒業。昭和22年（1947）大蔵省銀行局に入省するも翌年、創作活動に専念するために退職。戦前から日本浪漫派の影響を受けて創作活動を始め、『仮面の告白』『金閣寺』『天人五衰』など多数の小説を執筆した。世界的に有名な日本人作家となったが、昭和45年（1970）に自衛隊市ヶ谷駐屯地で自殺。

八代神社。初江が新治の航海の無事を祈った場所。

神島の港の風景。

監的哨。新治と初江がお互いの愛を確かめ合うクライマックスシーンの舞台。

不動岩。切り立った石灰岩のカルスト地形。